

消費から〈病〉へ
—— 〈万引〉する女性たちと寺田寅彦の〈エッセイ的思考〉 ——

瀬崎 圭二

要旨

明治40年代に本格化するデパートメントストア的な販売法は、実際的行為のレベルにおける〈万引〉の可能性を広げることとなった。急増する〈万引〉を前にした日本精神医学の泰斗呉秀三は、「万引（窃盗の一種）の精神状態」（明治42・1）の中で、欧米の精神医学が呈する〈窃盗癖=kleptomania〉なる概念を導入し、〈万引〉の原因を女性の〈ヒステリー〉から生じる〈虚栄心〉へと帰着させる。この呉の医学的見解こそが、呉服店／百貨店における女性の〈万引〉に対する認識のパラダイムを形象することになるが、言うまでもなくそれは性的な偏差を伴った欧米の精神医学を反復するものでしかなく、〈万引〉する女性達に対して〈病〉の認識を付与していくことになった。このような認識のパラダイムに亀裂を入れるのが寺田寅彦の「丸善と三越」（大正9・6）であり、寅彦の言説は、医学的認識の中で保持されている〈虚栄心〉という読解コード自体を疑問に付すと同時に、消費システムの虚構性を暴露する可能性を持った行為として〈万引〉を捉えている。こうした試みは、物理学という内部に自足することのない寅彦の言説における〈エッセイ的思考〉によって支えられていたと言えよう。

キーワード：消費，呉服店／百貨店，精神医学，文化研究，ジェンダー

はじめに

現在の精神医学において、窃盗癖／盗癖(kleptomania)と称される病がある。窃盗行為への衝動、欲望、誘惑に抵抗することができないという嗜癖性の病であるが、米国精神医学会の精神疾患の診断統計マニュアルである『DSM-IV-TR』によれば、精神疾患としてはまれな疾患で、発見された万引者の5%以下でしかなく、臨床例では患者の3分の2は女性であり、普通の窃盗行為や万引と区別されるのはもちろんのこと、反社会性人格障害や行為傷害とは区別され、躁病エピソードや精神分裂病の妄想や幻覚に反応して起きたり、痴呆の結果起きたりする意図的な盗みとも区別されるという¹⁾。精神疾患としての窃盗癖というカテゴリーは設けられているものの、その犯罪性はやはり否定されるべきものではなく、窃盗癖には、犯罪という側面と、嗜癖性精神障害としての側面の両

方が認められ、両側面からの対応が必要であるようだ²⁾。

現代の医学的言説は窃盗癖を以上のように表象するが³⁾、明治末期から大正期にかけての〈窃盗癖〉は、異なった様相を呈していた。エレイン・S・エイブルソン『淑女が盗みにはしるとき——ヴィクトリア朝期アメリカのデパートと中流階級の万引き犯』(椎名美智・吉田俊実訳 平成4・5 国文社)が示すように、百貨店の店内に大量に商品が陳列され、それを消費者が自由に目にし、直接手に触れ、選択し、気に入ったものを購入するという消費の身体的習慣が形成された時、大量の消費者を対象とする上では合理的なこのシステムは、言わば〈万引〉の増加を約束していたのである。同時代の医学的言説は、この万引という現象を捉えるべく、科学的な分析を用意する。そこに、〈窃盗癖〉という病が誕生するのだが、言うまでもなくその〈科学的分析〉には、様々な力学が張り巡らされていた。本稿は、消費者としての女性が形象された⁴⁾後の明治末期から大正期において、その消費の様相の中で浮上した呉服店／百貨店における〈万引〉という行為を、同時代の社会システムがどのように認識し、女性に対してどのようなイメージを付与しようとしていたのか明らかにすることを主な主眼としている。

1. 商品の陳列

そもそも商店の商品を盗むという行為の前提には、消費者が自由に商品を間近で見、直接手に触れるという購入行為の身体的習慣の形成がある。そのプロセスを追うことは非常に困難を伴うのでここでは差し控えたいが、近世期の絵画資料を用いて陳列技術の歴史性を追った高柳美香の研究⁵⁾を参照すると、都市部で商業が発達した近世期において、既に商品に直接手を触れ、購入を吟味する行為は現象しているようだ。しかし、近世期の小規模な店舗においては、商品を見るにしても触れるにしても、そこには店員の消費者に対する可視化された商品管理のまなざしがあり、そうした店員と消費者との関係性の中で商品を盗むという行為が実際のものとなるには、その店員の直接的な管理のまなざしをかいくぐらなければならないことになる。明治以後、商店の建築様式が変化しても、専門化、細分化された商品を、それぞれの小売店がその店員の管理の中で客に販売するという商業形態を保つ店舗においては、基本的にそうした事態に変化は訪れないだろう。内国勸業博覧会で売れ残った品物を陳列、販売する場として始まり、後には多くの小売店が寄り集まるような形で構成された勸工場や⁶⁾、比較的大きな店舗を有していた越後屋、白木屋等の呉服店にしても、やはり商品は店員のもとに管理されており、特に呉服店においては、消費者は、店員との折衝を経て、店の奥から出される商品を見、手にすることができた。そのような管理のもとでも、客による商品の窃盗は往々にして生じ、新聞草創期から勸工場や呉服店での盗難事件がしばしば報じられていくことになる⁷⁾。

ところで、近代的な消費のあり方を考える際に前提となるのは、商品を購入するとい

う行為とその商品に対する必要性とが必ずしも強固に結びつくものではないということだ。前述したような、店員との折衝を経て、ようやく商品を吟味できるような呉服店の座売りのシステムであるならば、商品を購入することなく、ただ視覚の戯れとして商品を見て歩くような気散じの対象としてその場が捉えられていくことはないであろうが、博覧会の陳列品に対するまなざしから派生した勸工場にあっては、言わば、その場が商品を購入する場としてのみならず、その空間自体を楽しむ気散じの場として機能するのである。初田亨や吉見俊哉⁸⁾が指摘するように、例えば辰の口や浅草にあった初期の勸工場は、庭園を設け、その中に茶店や休憩所を設置することで遊園地的な働きも併せ持っており、人々は遊興的な気分でその空間に参加していた。そして、繁華街に設立され、庭園を持っていなかった明治20年代以降の勸工場の多くは、遊園地的な場というよりも、そこに陳列された商品を見ること自体に対する楽しみを提供するようになるのである。吉見が整理しているように、博覧会から勸工場に到るプロセスは、「歩きながら商品を見比べ、そのなかに「新しさ」を発見し、またそうすること自体を楽しんでいく」、「〈眺める〉という経験」⁹⁾を与えるのだ。そうした、商品を見ること自体に対する楽しみ、及びその感覚を与える場の出現こそが、その商品の必要性から生じる購入という行為ではなく、商品を見るという時間 - 空間的な行為の中から生じる〈衝動買い〉という消費のあり方を生んでいくことになるのである。近代的な意味での消費が、〈衝動買い〉に代表されるような必要性からの離脱であるとするならば、既に明治10年代において実践されていたショーウィンドーという技術やガラスケースの中の商品の陳列は¹⁰⁾、消費者の視線と商品とを媒介するガラスというモノそのものに対する当時の人々の感覚をふまえても、見ること自体の楽しみをその技術の中に担保しているという意味において、〈衝動買い〉という行為をより一層加速させていく装置として機能するであろう。ならば、近代以降に生じた万引も、その商品に対する必要性という理由のみによって現象するのではなく、その場で欲望を喚起するこうした技術と深く手を結んでいると言えるだろう。しかし、当然のことだが、〈衝動買い〉が商品を見ることのみによっても現象するのに対し、万引は商品を見るだけでなく、それに手を触れることができなければ現象しない。つまり、明治40年代からの万引の増加という現象¹¹⁾は、不特定多数の消費者を対象とした商店において、消費者がそこに陳列された多くの商品に直接手を触れることで購入を検討できるような経験の拡大によって成立することになるのである。そのような経験を可能にするシステムが、広い空間に置かれた商品を自由に見、手に持たせることで、消費者を買う主体たらしめようとする〈デパートメントストア〉的販売方法なのだ。

ここで言う〈デパートメントストア〉的販売方法とは、文字通りのデパートメントストアというよりも、商品を陳列し、買う／買わないという選択を消費者に大きく委ねていく購入システムを採用した商店一般の販売形態を意味するが、前田不二三『商店の研究』（明治42・11成美堂書店）が同時代に指摘していたように、商店の店員と客との関

係の中で何よりも禁じられていたのは、店員が露骨な監視のまなざしをもって客と接したり、店員に商品を勧めたりするするような行為であり、商品を見る上での「自由の感情」と「沈静の感情」とが消費者に喚起されていくことこそが、商品販売の鍵となるのである。したがって、そこでは店員は、客を〈見ないように見る〉というような身振りが求められることになるだろう。前田が、「いらつしやい」と声を掛けられたり前へ来られたりすると客が何となしに窮屈であり又何だか強ひられる様な気持がする。三越等では決して然う云ふ事は為ない。真に縦覧御随意だ」と指摘するように、こうした販売方法を逸早く実践したのが、三井呉服店から三越呉服店へと到るプロセスであったことは言うまでもない。

明治28年8月、三井銀行大阪支店長であった高橋義雄は三井呉服店の理事に就任し、呉服店を近代化するための改革に着手する。若くして渡米し、アメリカの代表的百貨店ワナメーカーを訪れた経験がこの改革で生かされ、同年11月に三井呉服店本店二階を陳列場に改造、明治33年10月には本店全部を陳列場とし、座売りを全廃する。商品を陳列することで、消費者が商品を買うことなく見ることを許容する高橋のデパートメントストア的な販売法の導入は、後の株式会社三越呉服店の設立によって明治38年1月3日に公にされた「デパートメントストア宣言」の下準備としての役割を果たすことになるのである。明治41年4月には、木造ルネッサンス式3階建ての本店仮営業所が、大正3年10月にはルネッサンス式鉄筋5階建ての本店新館が営業を開始し、広い空間を備えた店舗を用意することで、ハード面でのデパートメントストア化を進める。そうした空間での陳列販売にも様々なアクセントが加えられ、例えば、寄切室や木綿類売場が消費者に自由に商品を持つことを許しているのに対し、宝石、指輪類売場では商品はガラスケースの中に陳列されていることから分かるように¹²⁾、自由に手に持って商品を吟味できるようにむき出しで陳列される商品と、ガラスケースやショーウィンドーの中に陳列される商品とがあり、商品の種類や価格による差異に基づいた陳列がなされ、消費者がそれを見て歩く身振りも商品に応じた変化を求められていくことになるのである。春秋2回催されていた「寄切見切反物大売出」の際には、大量の消費者が押し寄せ、その雑踏の中で雑然と放置された商品を奪い合うような事態も生じ¹³⁾、いわゆる〈バーゲン〉という販売様式を生んでいくことにもなる。

明治40年頃、三越の組織した流行会¹⁴⁾の会員であった篠田鉦造によって編纂され、三越呉服店専務取締役日比翁助の言行録形式で記述されている『三越小僧読本』では¹⁵⁾、小僧たちに、「其眼を水晶（愛嬌沢山）」にして「五つも六つもの眼を働かす」ことや、「美服の御客様を丁寧に取り扱ふと共に、粗服の御客様をも一層懇慫に取り扱ふ必要」があること、あるいは、「入店の折は家庭に不幸、煩悶、憤怒、不機嫌等のありたるものも店を出づる際には、「あゝ是で気持がさっぱりした。三越で遊んだので心の底まで愉快になった」と思はする」ことが求められているが、それは三越という場を、商品を買う（買

える)／買わない(買えない)を越えた気散じの場として用意することを意味している。そこでは「心の眼を左右に配り、客に些かたりとも、不快の感を与へ」(日比翁助)ないためのまなざしが小僧たちの身体規律の中に求められるのである。つまり、小僧に求められたのは、客を監視するように見るのではなく、客を外見の分け隔てなく愛嬌たっぷりに見ることであり、それは同時に、〈愛嬌〉のまなざしの中に、露骨に客を監視するようなまなざしを隠蔽していくという意味において、客を〈見ないように見る〉こともあるのだ。

ともあれ、こうした商品購入のシステムの変化に呼応した売り手と買い手との新しい関係性の構築と、そのまなざしの力学こそが、近代的消費システムの流行、及び〈ブランド〉の形象における商品の使用価値とその代価とのズレの肥大化を伴って、明治40年代からの実際的なレベルでの万引の増加を現象させていくことになるのである。

2. 呉秀三の〈医学的〉分析

こうした万引の増加という現象は、日本精神医学の泰斗である呉秀三の分析対象として浮上することになる。既に呉の『精神病学集要』(前編 明治27・9 後編 明治28・8 吐鳳堂書店)において、「窃盗欲」は「殊ニ女子ニ多ク困窮モセザルニ不用ニシテ賤廉ナル物品ヲ盗窃シ後多クハ自ラ之ヲ所有者ニ告ケ其罪ヲ謝スルアリ」とされ、「性欲ノ障碍」故に生じるとされていたが、明治40年前後からの万引の増加に対して発表された「万引(窃盗の一種)の精神状態」(「東洋学芸雑誌」明治42・1〈後「芸備医事」明治42・2~3に再録〉)においては、〈万引〉を広義の〈窃盗〉から分離して分析を施している。呉はこの論考の中で、まず窃盗を「搔擾」と「万引」とに大別し、前者を「番のあり又ははない店頭より目を掠めて迅速に奪ひさる」もの、後者を「店頭にて番人の前で色々の品物を選る如き様をして或品を誤魔化し持ち去る」ものとした上で、「近頃になりて価格均一の店も出来、就中呉服店などに売出しと称へて数多く品物を陳列し寄切れなどは唯々積み重ね押し列べて諸人の見るに任せ弄るに委ぬること行はれ来つたから、又一種の万引が始まつた」という。呉の言説は、「万引」を敢えて「窃盗の一種」として説明し、万引を再定義することで従来のそれとの断絶を指摘しているが、ここで「番人の前で」持ち去る窃盗として万引を定義しているのは、それが客を〈見ないように見る〉ような身振りで管理する「番人の前で」現象する行為であることを意味している。「搔擾」が視覚を越えた迅速さのもとに行われるのは、盗む側から窃盗行為を見えないようにすることで店員のまなざしを遮断するためであるのに対し、「万引」は、店員が見ていないふりをするので、店員のまなざしが予めの監視のそれとして強く働かないところにあらわれるのである。そうした〈見ないように見る〉という店員のまなざしの中でこそ、商品を自らが選択するという消費者の〈主体性〉が成立するのだ。よって、これまでの万引との違いが、客を買う〈主体〉たらしめる三越という固有名と結びつき、そのデパート

メントストア的販売様式において問題化されるのである。さらに呉の言説は、万引という現象を、「普通の悪人で所謂前科者」によるものと「左様でない出来心で不図窃みにかゝるもの」とに分類し、この出来心から盗んでしまう類の万引が女性に多い理由を、婦人の「虚栄心」へと帰着させる。おそらくはショーペンハウエルの女性論¹⁶⁾等によって流通し、女性に特有な属性として認識されることとなった〈虚栄心〉は、明治40年前後から、浅薄に流行^{モード}を追う女性を批判するタームとして用意されることになるのだが¹⁷⁾、呉の言説では「虚栄心に対しての抵抗力は或る病症に於ては甚だ薄弱になつて自分から是ではならんと制することが出来ない、此様なのは神経衰弱症又は臆躁症^{ヒステリー}に罹つてゐる人である」として、「虚栄心」の発動が医学的見解との交錯のもとに捉えられている。この呉の論証の背景にあるのは、百貨店の出現に伴う大量の万引者を分析した欧米の医学であり、百貨店における女性の万引についての初期の研究ではもっともよく知られた一人であるフランスの精神医学者ポール・デュビュイソン¹⁸⁾や、「kleptomanie」(独)という用語を提唱したマルク¹⁹⁾等による欧米の研究結果が参照されることで、万引者が「精神の健康なる人」、「精神の異常なる人」、「精神の疾病(著明なる異常)ある人」の三つに分類されることになる。おそらく「精神の健康なる人」による万引は全くの犯罪として処理されるものであろうし、「精神の疾病(著明なる異常)」なる人による万引は〈狂気〉として処理されるものであろう。明治40年代以降の医学において問題となったのは、「精神の異常なる人」による万引で、この現象を科学的に分析し、病であるか否かを判断するために、様々な読解コードが用意されることになるのである。例えば、呉秀三と田沢秀四郎が、東京地方裁判所の依頼のもとに白木屋と松坂屋で大量の商品を万引した女性を精神鑑定した「窃盗○藤○ク精神状態鑑定(一)」(「国家医学会雑誌」明治42・2)では、女性の遺伝歴、既往歴、家庭及び生活態度、犯罪の前後の様子、診断時の身体症候や精神症候などがその精神の読解コードとして用意され、「犯罪ノ当時軽度ノひすてりニ罹カトリ居リシコト事実ナリ然レドモ其際患者ノ意識ハ清明ニシテ且ツひすてりノ證候トシテ窃盜行為ハ何等ノ関係ヲ有スルモノニアラズ元來婦人ノ多数ハひすてり一性ノモノニシテ之レヲ以テ直ニ精神病者ト称スルコトヲ得ズ同被告モ亦ひすてり一ヲ有スト雖ドモ其度軽度ニシテ精神病者ト認ムル程ノモノニアラズ」という鑑定が下されることになる。この鑑定は精神医学の分類の中で、「精神の異常なる人」の万引が犯罪として認められたケースになろう。こうした呉の動向には、刑法の改正に伴う精神医学と司法との関係が背景にあり、「犯罪の領分を侵食することによって、そこに狂気の領分を確保する」(芹沢一也)²⁰⁾という精神医学側の目的に沿った明治40年改正の新刑法においては、「心神喪失者」と「心神耗弱者」の区別が厳密になされ、〈狂気〉の程度が詳細に測定された上で犯罪が裁かれなければならない²¹⁾、この呉の万引に対する言説も、〈犯罪〉として容易に処理され得ない〈病〉としての〈万引〉を確保しようとする言説としても捉えられよう。

しかし、この言説に刻まれた、呉の「元来婦人ノ多数ハひすてり一性」であるという医学的認識は、結局のところ、大多数の女性の万引の可能性を認めることになり、女性でありさえすれば万引をする可能性が高くなることを〈科学的に〉保証していくことになるだろう。万引の原因を〈ヒステリー〉や〈月経〉に求めていく欧米の精神医学の成果や、それを紹介した呉秀三の医学的見解は反復され続け、呉秀三のもとで精神医学を学んだ杉江董も、『犯罪と精神病』（大正元・10 巖松堂書店）において、犯罪の病的動機としての「窃盗欲」を「こは常に高価の物品をのみ盗むものと限らず或は無意味、無価値のものを窃取することあり。斯かる場合には一見病癖なることを知らる。殊に白痴、精神病性格、歇私的里（ヒステリー〈引用者注〉）の婦人殊に妊娠、月経時に多し、婦人の万引は之に由る場合多し」とし、やはりロンブローゾ等の欧米の研究成果をふまえた上で、ヒステリーや妊娠、月経時の婦人に万引を焦点化している。こうしたセクシュアリティとの結びつき²²⁾の上に施された呉や杉江の医学的分析が、〈病〉としての万引という現象を浮上させていくことになるのだ。周知のように、呉は明治33年の精神病者監護法の制定による精神病者の「私宅監置」を批判し、精神病者の医療と保護に対して情熱を注いだ人物として評価されるが、この明治末期からの万引する女性たちの分析に関しては、欧米の精神医学の基盤にあるジェンダー認識までも反復してしまう結果に陥っている。

以後、このような万引をめぐる言説は、医学系の学術雑誌から女性誌を中心とした商業誌へと流通するようになり、そこでは、医学者に留まらない様々な領域の識者達が呉等の〈医学的〉分析を支えとした上で、万引というスキャンダルに対する社会的な意識を構築していくことになり²³⁾、万引が女性の本質であるかのような言説が構築されていくことになるのである。このような言説が女性誌を中心に掲載されていくのも、女性に降りかかるであろう〈病〉を管理するべく、女性が〈主体的に〉解決すべき問題として提示されているが故であろうが、万引の原因が、〈ヒステリー〉というフィクションによって支えられ、〈虚栄心〉という非科学的分析コードによって表象される限りにおいて、この〈病〉を女性たちが〈主体的に〉予防することが不可能であることは言うまでもない。

呉服店／百貨店で現象し始めた女性たちの万引は、その万引をする女性たちが比較的裕福な者である場合があったが故に、了解不可能な現象として捉えられ、科学的にその理由が説明される必要性の中で、この〈不可解な〉女性たちが近代医学のまなざしのもとに置かれることになったのである。そもそも女性の万引を可能にしたのは、資本主義社会のジェンダー編成のプロセスにおいて求められる消費者という属性に対して、呉服店／百貨店という場が用意されたためであるが、この現象を理解するために導入されたのが、〈妊娠〉、〈月経〉、〈ヒステリー〉という身体的な分析コードや、明治40年代から大正期にかけて流行を追う女性を分析、批判する上で多用された〈虚栄心〉といった道

徳的な分析コードであり、言わば、欧米の百貨店における万引の分析が、そのまま日本の呉服店／百貨店における女性の万引に当て嵌められたのである。そういった形で女性に焦点化された万引に対して、〈月経〉や〈妊娠〉が分析コードとして導入されるのも、それらが男性には身体的に経験不可能な現象であるからであり、〈ヒステリー〉が導入されるのも、他者としての女性の心身状態を表象するのに便利な〈フィクション〉であるからに過ぎない。また、〈虚栄心〉という主要な分析コードは、^{モード}流行を追う軽薄な女性を批判するためのタームとして流通していたが、ここには「医学と道徳との共謀関係」(M・フーコー²⁴⁾)を容易に見出せ、この時期から現象し始めた万引という問題が、^{モード}流行の形象と不可分であることをそれ自体が物語っているという意味において、当時の〈病〉である万引を何ら〈科学的に〉説明するに至っていない。〈虚栄心〉は、女性嫌悪から派生した分析コードでしかないのである。そして、了解不可能な上流階層の女性や、教育ある女性による万引が、その社会的ポジションに対する意識によって、〈犯罪〉ではなく〈病〉として表象され、その〈病〉の分析のために用いられた〈月経〉、〈妊娠〉、〈ヒステリー〉、〈虚栄心〉といったコードのために、病の〈原因〉そのものが〈万引〉を女性に焦点化させる力学をさらに強化していくことになるのである。

三越や白木屋等の呉服店／百貨店が近代的消費システムをつくりあげようとした際に、女性を^{モード}流行を追う存在として形象しようとしたのであるならば、この万引という現象に関しても、^{モード}流行を追う消費者という属性を付与された女性に限定された形で処理され、女性の身体的性質等を用いた科学的、医学的読解という〈客観性〉の諸形態において、〈精神の疾病〉なる認識が付与されていくことになる。消費社会の到来と共に女性に本質化されることになった消費者という属性こそが〈病〉としての万引を表象する力学を支えているのだ。そして、この〈病〉という力学の故に、上流階層の婦人の万引における犯罪性の側面は留保されることになるのである。やはりこの背景には、裁判官の裁量が拡大され、違法行為の背後にある人格までもが裁判の対象となる改正刑法²⁵⁾との関係があり、そこで問題とされる〈人格〉の高低が〈社会的ポジション〉の高低によって表象されるのであるならば、その犯罪性の留保はより一層加速することになるだろう。

3. 寺田寅彦の〈エッセイ的思考〉

欧米の精神医学を導入した呉秀三等によって形成された医学的認識が流通、通俗化していく中で、寺田寅彦の「丸善と三越」(初出「中央公論」大正9・6)というエッセイが発表されている。この言説は、随筆／エッセイというジャンル自体の成熟と相俟って、エッセイストとしての寅彦の地位を確立したものとして知られるが²⁶⁾、ここでは「かつて何かの雑誌で「万引の心理」という題目で大いに論じたもの」²⁷⁾を読んだ経験から、その行為の根拠をなす〈虚栄心〉に対して疑義が提示されている。「通例女の虚栄心というものは、人間のあらゆる本質的欲求の団塊の、ほんの表面の薄膜に生ずる黴くらの

ものように取扱われているようであるが、果してそんなものだろうか」という疑問は、同時代の他の言説による「女の虚栄心」の表層的な扱われ方自体への問いかけであり、言わばその疑問によって大正期の社会システムそのものを相対化する可能性を持った現象として「女の虚栄心」を捉えようともしている。さらに、「婦人が、美服に対した時に、あらゆる理知の束縛を忘れ、当然な因果を考える暇もなく」行われる衝動としての万引は、「それほど浅薄な不真面目なものばかりとも思われ」ず、「その衝動の背後には、卑近な物質的の欲望の外に、存外広い意味において道徳的な理想に対する熱烈な憧憬が含まれているかもしれない」とし、^{モード}流行、〈ブランド〉を追うことを強いられた女性たちの万引という行為に、消費社会システムそのものを攪乱していく女性の〈抗い〉の行為としての可能性を読み取ろうとしている。故に、万引に対して「社会の組織制度に関するある理想に心酔して、それがために奪い殺し傷つける事を敢えてする団体」との共通性を見出すのである。暴力を伴った革命がシステムそのものを相対化し、再編するものであるならば、再編を経た後に事後的に破棄されていくそれ以前のシステムや法体系は全くのフィクションとして追認されていくという点において、ここでは、女性たちの〈抗い〉としての万引が、それを犯罪として罰し、あるいは〈病〉としてその犯罪性を留保していく当時の社会システムや法体系の虚構性そのものを暴露し、解体していく可能性を持った行為として捉えられていると言えよう。そして叙述は、「一体普通に使われる利己と利他という両つの言葉ほど無意味な言葉は少ない。元来無いものに附せられた空虚な言葉であるが、さもなければ同じ物の別名である」として、他者の欲望のもとに生産と消費が不可分なものとして循環していくことを見抜いた利己と利他の脱構築へと連鎖し、そのような思考から「吾々の趣味や好尚は存外外面的な事情によって自由に簡単に支配され得るものだと思う」として、^{モード}流行の権力性を暴露したり、「買物という行為を単に物質的にのみ解釈して」、「近処の店で得られると同じ缶詰など」をわざわざ三越まで買いに来る人を「一概に愚弄する人があるが、自分はそれは少し無理だと思っている」として、安直な〈ブランド〉批判に疑問を投げかけてもいる。つまり、このエッセイでは、犯罪であること／病であること自体への問いが一端留保された上で万引という行為が解説されようとしており、そこには医学や道徳、法が形成する規範の外部への志向が内在化されているのである。そしてその外部への志向性は、寅彦自身の専門領域である物理学という内部との弁証の上に〈エッセイ的思考〉を表出し、呉秀三に代表されるような近代的知の体系を脱臼させていくのである。

この〈エッセイ的思考〉の可能性は、後年の「科学と文学」（初出 岩波講座『世界文学』昭和 8・9 波書店）において自己言及されており、そこでは、エッセイは「科学者が科学者として文学に貢献し得るために選ぶべき一つの最も適当なる形式」として捉えられ、科学者として文学に貢献すること、つまり物理学という内部において文学という外部を志向する上での可能性がエッセイというジャンルに見出されている。「論理的な

論理」ではなく「非論理的な論理」、すなわち「今の人間のまだ発見し意識し分析し記述し命名しないところの、人間の思惟の方則」は、予定調和的に閉じられていく知の体系をなぞるのではなく、「非論理的な論理」＝「夢の論理」という、秩序だった体系的な知を永続的に遅延させ、互いに連関性を持たないような話題の断片を連鎖させていく叙述運動を現象させるのである。言うまでもなくその〈エッセイ的思考〉は、自らの〈内部〉とも言える物理学そのものにも向けられ、物理学の〈客観性〉が一部の人間の共同主観性に過ぎないことを前提に、自己の〈身体的感覚〉の相対性という限界を知りつつもそれを取り戻すことで、物理学の〈客観性〉の諸形態を乗り越えようとし²⁸⁾、あるいは、その感覚を通じた観察と、観察の集積を数値化した統計による考現学的手法のもとに出来事を捉えようとする。ここで言う観察とは、現象を客観的に捉えるのみならず、その〈客観性〉を成り立たせているシステムの内部に分け入って現象を捉えようとする態度としてとりあえずは定義できようが、先の万引に対する考察も、こうした態度によって支えられていることは言うまでもない。統計はそのような観察的態度を補完する方法として機能し、例えば、寅彦のエッセイの中で数度取り上げられている〈電車の混雑〉という現象に対しては、その混雑の統計を集計し、その周期性を明らかにするという観察によってその現象を捉えようとする²⁹⁾。電車は、都市を自由に移動することを可能にしつつもそれ自体が都市の特定の場所しか分節化することを許容しない拘束性を発揮し、そこに混雑という状況が加われば、幾重にも拘束された空間を現象させることになるが、例えば「路傍の草」(初出「中央公論」大正14・11)では、「満員電車の内は存外瞑想に適している」と、その空間を更なる身振りによって分節化し直そうとすることで、電車、あるいはエレベーター³⁰⁾といった近代文明の身体化になお合致され得ない身体的感覚の残余をすくい上げつつ、近代文明に対する受容と反発を反復＝差異化していくのである。もちろんそれは電車やエレベーターという近代文明の個別の装置にのみ向けられるのではなく、東京という都市全体に向けられていき、例えば、「銀座アルプス」(初出「中央公論」昭和8・2)にあるように、「近代的感覚」を備えた〈銀座〉という場にこそ〈近代〉の空虚を充填しようとする身振りにもあらわれていると言えよう。

銀座を語った「銀座アルプス」は、過去の銀座の記憶との交錯の中でその場が叙述されていくエッセイであるが、そうした断片的にしか想起され得ない記憶の交錯によって、現在の銀座という場が分節化されていく。「事柄によっては三十年前がつい近頃のように思われ、また事柄によっては去年の事が十年前のようにも思われる」という記憶のパーソペクティブは、言うまでもなくノスタルジーのうちに現在の銀座を否定し、無化していくのではなく、その過去を現在のもとに引き戻しつつ現在を分節化し直すような弁証法的身振りなのである。それは、「ある名状し難い空虚」を感じる「心の淋しい暗い人間」が「せせこましくごみごみとした人いきれの銀座」を求めることで、他者に見られていることを内面化しているような都市の群集を発見しつつ、その群集から一定の距離

を保つようなポジションから、自己の身体的感覚を通じた観察、統計を通じて都市を身分け／言分けることでもある。デパートメントストアの店員が客を〈見ないように見る〉まなざしは、店員のものだけではなく、他者に向けられた都市の群集のまなざしでもあり、他者を見ないように見つ、他者に見られているまなざしを内面化している都市の店員や群集の自意識を、観察、統計化するようなポジションこそが寅彦の言説における〈エッセイ的思考〉を可能としているのである。

そのような身振りのもとでこそ、消費システムを代表するデパートメントストアが「美しい物と人との「御花畑」、あるいは「一つの公園であり民衆の散歩場」、「同時に博物館であり、百科辞典であり、また一種のユニヴァーシティ」³¹⁾として捉えられ、デパートメントストアなるものをさらに拡散、多様化し、かつ固定しないような認識が可能になる。そして、デパートメントストアの商品には「あのように沢山にあるものの中で自分の趣好に適合するものの少ないのに困る」にも関わらず、その場の可能性が、「陳列されてある商品全部が自分のもので、宅へ置き切れないからここへ倉敷料なしの只で預けてある」という認識の中に浮上し、陳列することで欲望を喚起する戦略に基づいたデパートメントストアの技術を自らのもとに奪還していこうとするのである。あるいは、その商業戦略を〈アルプス〉に喩えられるようなデパートメントストアの建築物の〈高さ〉に見出し、人々が俯瞰的視線を手に入れることが出来るような近代の文法を反復していることを見抜いた上で、その〈高さ〉を〈アルプス〉として、その内部を〈御花畑〉として捉えることで、やはり単純な〈文明批判〉を反復することから逃れている。

そうした身振りのもとに「丸善と三越」もまた編まれており、万引を分析する医学的、科学的言説に対する疑問も、丸善や三越を今ここに訪れた際の身体的感覚を通じた観察によって支えられているのである。例えば、書物の商品化や、書物と他の商品との並列化によって〈デパートメントストア〉と化した丸善においても、「街路に向かった窓の内側に淋しい路次ようになって哲学や宗教や心理に関する書棚が並んでいる」として、その店内にひしめく書物を見、記憶をめぐらせながら歩くことと都市を遊歩することとの相同性が語られているが、それは商品を見ること自体を楽しんで歩くような、博覧会から勧工場、そしてデパートメントストアへと到る空間が生んだ身振りとは異なり、敢えて「淋しい路次」を見つけて歩くような、書物が商品化しつつある現状にあってなお過去の書物に「多くの未来の種が満載されている事」を意識し、過去の意識されない知を意識するような、弁証法的身振りなのである。そうした記憶の現在化とでも言うべき身振りは、「丸善と三越」発表時には既に終結していた第一次大戦（大正7年11月終結）の残滓を丸善のドイツ書の棚に生じた欠損に見出し、日本においては参戦の実感のないまま成金という現象を引き起こした戦争の記憶を、ドイツ書の〈欠損〉として再び現在のもとに引き戻すと共に、その経験を読者にも分有していくことにもなる。一方三越においても、「月に幾回三越に行くという事」を自慢する婦人と、「まだ一度も三越に行っ

た事がないという事」を主義とする学者という同時代の三越をめぐるジェンダー化、通俗化された認識を「自分のみならず多くの方は三越に行く事を別に名誉とも恥とも思っていない」と無化し、三越に集まる女性の顔に「迷いや悶えの気の毒な表情」を読み取るという観察を通じて、流行、〈ブランド〉を迫ることを強いられた女性たちの内面を代行表象しようとする。「ずいぶん色々の物を覚え色々の問題にぶつかる、そして色々の人間の色々の現象を見せてもらう事ができる」三越という空間は、それが消費システムを代表する空間としてではなく、〈色々〉のモノ、コト、ヒトがざわめく空間として身分け／言分けられ、呉秀三等の医学的見解によって定着させられた万引に対する体系的思考に非同一的な亀裂を生じさせていくのである。後年「銀座アルプス」等で記述されるような〈デパートメントストア〉の可能性の萌芽は既にこのエッセイに見出されており、その販売戦略のうちに設置されていく食堂や、美術展覧会等の催し、花卉盆栽を並べた温室といった一連の装置に表象されるデパートメントストア的戦略の内部から、その装置の断片を自らのもとにつなぎ直すことでその空間を自在に分節化し直し、そのシステムを引き離しつつ、自らのもとに引き寄せていこうとしている。つまり、丸善においては記憶の現在化のもとにその店内の書物の陳列技術を分節化し直し、三越等のデパートメントストアにおいては、その販売戦略であるモノ、コト、ヒトの陳列的総合性を自らのもとに断片化し、再編しようとするのだ。それを支えるのが身体的感覚を通じた観察なのであり、前述したように、そのまなざしは、デパートメントストアの店員や都市の群集のまなざしへの非同一化のもとに現象するようなまなざしなのである。そして、書物だけでなく他の商品も並べた丸善や、色々なモノ、コト、ヒトがざわめく三越という空間からの帰宅途中、更なる「色々変わった形や響き」が「意識の上に浮び上がって来る」ことで、丸善や三越の〈色々〉が増殖、拡散されていくのである。

また、「丸善と三越」による、呉秀三に代表されるような医学的言説の脱臼は、そうした身振りにのみあるのではなく、「P君」と呼ばれる人物に代表されるような他者の声を内在化することで、その叙述の進行を語り手のみによって構造化することなく、時にその叙述を逡巡、反芻しつつ、叙述の断定を絶え間なく遅延させているという点にも見出せよう。それはこのエッセイの末尾にも明白に見出され、丸善や三越からの帰宅途中に視界に入った「人足の機械的に動く」ことや「船頭の女房が鱸で菜の葉を刻んだり洗ったりする」こと、あるいは「若芽を吹いた柳の風にゆらぐ」ことに対する観察から、丸善や三越を「世にもつまらない無用の長物」として捉え直した末に、その記憶さえも「すっかり忘れて」しまい、「日曜日の自分は消えてしまう」ことで、またも思考の目的＝結末は遅延されていくのである。こうした〈エッセイ的思考〉が、「日曜日の自分」に限定された身体的感覚において捉えられる観察という方法によって支えられているが故に、その叙述は〈結論〉と呼ばれる論理の終着点を求めることなく、まさにエッセイ＝試みとしてその叙述の逡巡、反芻が維持されたままで閉じられていくのだ³²⁾。

おわりに

ところで、明治末期から大正期にかけての呉秀三等の万引に対する分析や、その基盤となっている欧米の医学的認識が、これまでに述べてきたようなジェンダー規範に大きく依っているものであるとしても、医学的な知のレベルにおいてその分析が全般的外れであったわけではなく、現在の精神医学においても、月経と女性の心身状況との関係については依然考察の対象となっている。近年の精神医学においては、月経、妊娠、分娩等の女性の生殖作用と行動の障害とは、直接的な因果関係によって結ばれるものではないことが明らかになり³³⁾、特にK・ダルトンは、内分泌学の導入によって、女性のPMS（月経前症候群）や産後抑うつ症が、妊娠ホルモンであるプロゲステロンの値の低下によって生じることを明らかにしている³⁴⁾。日本においても、昭和30年代の段階で、月経と女性の犯罪を直接的な因果関係で結ぶ従来の分析を相対化し、脳波や内分泌学的検査の必要性を説く言説があらわれている³⁵⁾。現代の精神医学が設ける〈窃盗癖〉についても、冒頭で挙げた『DSM』には、月経やヒステリーとその病との関係については何ら触れられていないし、もはや1980年代からの『DSM』では、〈ヒステリー〉という語そのものが用いられていない³⁶⁾。

最後に断っておくが、本稿は万引の犯罪性を否定するものでも、〈窃盗癖〉や〈PMS〉、〈産後抑うつ症〉といった医学的カテゴリーを疑い、批判するものでもない。ただ、現在の医学が設ける窃盗癖やPMS、産後抑うつ症といった病を抱え込んだ〈女性〉たちの行動の障害の一つがなぜ万引や窃盗という行為になってしまうのか、あるいは、冒頭で述べたように、窃盗癖という病がなぜ男性よりも女性に多いのかといった問いそのものを相対化するものである。つまり、女性には、消費者という〈意味〉がその身体に付与されているということ、そして、その〈意味〉は、近代の消費社会システムの形成において、女性を流行、〈ブランド〉を迫る消費者として浮上させる力学の果てに生まれたものであるということ、及びその力学は現在もお強力に作動するものであるということ、こういった点を万引という〈病〉に見出すものである。明治40年代から浮上する〈病〉としての女性の万引は、加速していく消費の速度をめぐる一つの表象なのだ。とするならば、窃盗癖という病、あるいは、現在の高度消費社会下で頻発する〈買物依存症〉という〈病〉をつくりあげた社会システムが、どのような力学のもとに編成されているのか、もはや言うまでもないだろう。そうした高度消費社会のシステムに対して、個々人の〈エッセイ的思考〉の強度が今問われているのかもしれない。

註

- 1) 『DSM-IV-TR 精神疾患の診断・統計マニュアル』（高橋三郎・大野裕・染谷俊幸訳 平成14・2 医学書院）参照。

- 2) 赤城高原ホスピタルの HP、〈窃盗癖〉の項(<http://www2.wind.ne.jp/Akagi-kohgen-HP/Kleptomania.htm>)を参照。
- 3) ここで〈表象〉という語を用いたのは、現在の精神医学の診断基準である『DSM』に記載される〈病〉が、依然としてジェンダーやレイシズムの力学から自由ではないからだ。詳しくは、ハーブ・カチンス、スチュアート・A・カーク『精神疾患はつくられる——DSM 診断の罟』(高木俊介・塚本千秋監訳 平成 14・10 日本評論社)を参照のこと。
- 4) 拙稿「流行／モードを追う女性——三越、白木屋呉服店 PR 誌における文学的言説——」(「日本文学」平成 13・2)を参照のこと。
- 5) 高柳美香『ショーウインドー物語』(平成 6・10 勁草書房)
- 6) 初田亨『百貨店の誕生』(平成 5・12 三省堂) 参照。
- 7) 例えば、明治 7 年から明治 29 年までの「読売新聞」では、約 70 件の商店での盗難事件に関する記事が掲載されている。
- 8) 初田亨(前掲書)、吉見俊哉『都市のドラマトウルギー——東京・盛り場の社会史——』(昭和 62・7 弘文堂) 参照。
- 9) 吉見俊哉(前掲書)
- 10) 高柳美香(前掲書) 参照。
- 11) 実際、明治 40 年からの『警視庁統計書』は、「窃盗犯手段月別」という分類を施し、窃盗の一手段として「万引」の項を設けている。ちなみに明治 40 年に犯罪者数 73 であった万引は、大正 14 年には 2200 という大幅な増加を示している。もちろん、これは呉服店／百貨店において行われたものだけを示す数ではない。
- 12) 「最近の三越呉服店」(「時好」明治 40・5) 参照。
- 13) 浜田四郎『百貨店一夕話』(昭和 23・12 日本電報通信社) 参照。
- 14) 流行会については、神野由紀『趣味の誕生 百貨店がつくったテイスト』(平成 6・4 勁草書房) に詳しい。
- 15) 『株式会社三越 85 年の記録』(平成 2・2 株式会社三越) 参照。『三越小僧読本』の引用も同書による。
- 16) 例えば、ショッペンハウエル『恋愛と芸術と天才と』(角田浩々編 明治 40・1 隆文館) 等が想定される。
- 17) エレイン・S・エイブルソン『淑女が盗みにはしるとき——ヴィクトリア朝期アメリカのデパートと中流階級の万引き犯』(椎名美智・吉田俊実訳 平成 4・5 国文社) によれば、〈虚栄心〉は、欧米の医学的言説が万引を読解する際に用いられたコードでもあるが、医学とは別の所でも〈虚栄心〉は、女性を戒めるタームとして明治 40 年代以降の女性誌に頻出する。この点については別稿に譲りたい。
- 18) エレイン・S・エイブルソン(前掲書) によれば、フランスの精神医学者ポール・デュビュ

イッソン(Paul Dubuisson)の論文「デパートにおける女性の泥棒(“Les Voleuses des grands magasins,” Archives d’anthropologie criminelle, XVI 1901)は、殊によく知られたもののひとつであるという。

- 19) 『新版 精神医学事典』(平成5・2 弘文堂) 参照。
- 20) 芹沢一也『〈法〉から解放される権力、狂気、貧困、そして大正デモクラシー』(平成13・9 新曜社)
- 21) 旧刑法第78条「罪を犯す時知覚精神の喪失に因て是非を弁別せざる者は其罪を論ぜず」という条文は、新刑法第39条「心神喪失者の行為は之を罰せず、心神耗弱者の行為は其刑を減刑す」に改められた。
- 22) 川村邦光「女の病、男の病 ジェンダーとセクシュアリティをめぐる“フーコー”の変奏」(『現代思想』平成5・7) 参照。
- 23) 例えば、杉江董「万引する婦人」(『婦人画報』明治44・10)、「婦人と万引」(門田喜四郎「警察官の見た万引」、福来友吉「心理学者の見た万引」、杉江董「精神病学上の研究」)(『婦人世界』大正元・12)、山本清吉「万引をする女」(『婦人画報』大正元・12)、小金井よね子「女を罪に導く誘惑の魔の手」(『婦人公論』大正7・1)、「万引女の研究」(記者「万引の実例四つ」、片山国嘉「心身不健全の結果」、中村勇「一時の出来心」、上野陽一「万引の心理的考察」、福鎌恒子「家庭教育の改善」、西尾喜平「地方より上京する婦人達へ」)(『婦人世界』大正14・4) など。
- 24) ミシェル・フーコー『狂気の歴史——古典主義時代における』(田村俣訳 昭和50・2 新潮社)
- 25) 芹沢一也(前掲書) 参照。旧刑法第366条「人の所有物を窃取したる者は窃盗の罪と為し二月以上四年以下の重禁錮に処す」は、新刑法第235条「他人の財物を窃取したる者は窃盗の罪と為し十年以下の懲役に処す」に改められ、最高10年の刑が科せられると共に、新刑法第57条により累犯に到っては20年までの懲役刑を科すことが可能になった。そのような刑の振幅と裁判官の裁量のもとに、窃盗罪は裁かれることになる。
- 26) 『日本近代文学大系』第34巻 寺田寅彦集(昭和48・11 角川書店) 参照。
- 27) おそらく「万引(窃盗の一種)の精神状態」を再録した、呉秀三「万引女の心理」(『生活』大正6・12)のことであろう。
- 28) 「物理学と感覚」(初出「東洋学芸雑誌」大正6・11)
- 29) 「電車の混雑について」(初出「思想」大正11・9)
- 30) 「蒸発皿」(初出「中央公論」昭和8・6)
- 31) 「夏」(引用した「一 デパートの夏の午後」の初出は「現代世相展望」(七)〈「大阪朝日新聞」昭和4・8・27〉)
- 32) こうした寅彦の言説に見られる〈エッセイ的思考〉という身振りには、TH・W・アドルノがW・ベンヤミンに見出したようなエッセイの可能性との相同性がうかがえる(TH・W・アド

ルノ「形式としてのエッセー」〈『文学ノート』三光長治・菅谷規矩雄・船戸満之・片岡啓治訳 昭和53・8 イザラ書房〉)。

- 33) 斎藤学・波田あい子編『女らしさの病——臨床精神医学と女性論』(昭和61・12 誠信書房) 参照。
- 34) K・ダルトン『PMS 法廷に行く——月経前症候群と女性の犯罪』(児玉憲典訳 平成10・4 誠信書房)、同『マタニティ・ブルー——産後の心の健康と治療 (新版)』(上島国利・児玉憲典訳 平成12・12 誠信書房) 参照。
- 35) 例えば、小木貞孝・石川義博「女子犯罪と月経との関連について——1 ナルコレプシー患者の犯罪精神医学的考察——」(『犯罪学研究』昭和36・12) など。
- 36) 姉齒一彦「訳者あとがき」(J=D・ナシオ『ヒステリー 精神分析の申し子』姉齒一彦訳 平成10・4 青土社) 参照。

※ 寺田寅彦のテキストの引用は『寺田寅彦全集』(平成8・12～平成11・8 岩波書店) によった。